

言語は人間を人間たらしめる本質的な能力であるが、きわめて多様な局面を持っている。

- まずそれは、衣食住が人間のもっとも基本的な物的環境であるように、もっとも基本的な文化環境である。すべての人間は家庭と近隣の人間関係を通じて第一言語(母語、土着語、方言)を習得する。それは人間の生活、とりわけ精神生活の基盤を構成するものであり、それが自由に行使できない状況は、大きな不安を生み出す。食の安全を守ることが大事だとすれば、第一言語の安全を守ることと同じように重要なはずである。ただしこの局面における言語(第一言語)は、人間であれば誰でも習得する能力を備えているので、制度化された教育とりわけ学校教育の対象ではない。
- しかし言語は環境であるばかりでなく、それに対して働きかける道具でもある。自己、他者、集団、社会への問いかけと応答、そしてそれに基づく実践を可能にする能力である。挨拶、交易、交渉、演説などにおいて言語が主導的な役割を演ずるのは当然であるが、そこで行使される言語は、たんなる環境としての第一言語ではなく、読み書きをはじめとする教育によって表現力を増大させ、共通語ないし標準語として公共性を獲得した言語(公用語、ある国における公用語という意味での〈国語〉)である。
 - ▶ 国民国家成立以前、あるいは前近代社会においては、国語が教育の対象となることはなかった。読み書きを習う少数のエリートが学んだのは、たとえばヨーロッパであれば、当時の国際共通語であったラテン語であり、俗語と見なされたそれぞれの地域の言語(英語、フランス語、ドイツ語など)について、正書法や文法の規範を教える必要があるとは思われていなかった。
 - ▶ 国語が教育(とりわけ公教育)の重要な課題になったのは、大まかに言えば、国民国家の形成と軌を一にしている。それは、国民国家のメンバーとなる国民に要求される言語が、母語ないし方言としての第一言語では不十分であることが自覚されたからである。もしも自国の国語を〈母国語〉と呼ぶことができるとすれば、母国語と母語は区別しなければならない。母国語としての日本語は、それぞれの日本人の母語に根ざしているが、母語が自然の側にあるのに対して、母国語は文化と社会(さらには国家)の側にあり、否応なしに教育の対象となる。
- 以上は、異なる言語文化との接触を想定しない議論であったが、地球上には多数の言語が存在する。異なる言語文化との接触と交流は、どのように行われるか。それはおおよそ次の四つのタイプに整理できる。1) 先方がこちらの言語を使用する。2) こちらが先方の言語を使用する。3) 媒介者(通訳等)を利用する。4) 双方が互いに運用できる別の言語(媒介言語)を用いる。1)と3)のケースでは、個人が積極的に異言語を学ぶ必要性はないので、ここでは問題としない。(ただし社会ないしは国家の観点からすれば、1)については自国語の国際的普及、3)については言語文化媒介の専門家の養成が政策の課題となる。)
- 2)については、それが可能になるためには、こちらが相手の言語を学習し、ある程度運

用できる能力を身につける必要がある。接触の状況に応じて学ぶべき言語はいくらでもあるが、一定の規模での教育と学習の対象となるのは、公用語ないし国語として機能している有力言語であり、それがいわゆる〈外国語〉である。つまり、自国とは異なる国や地域で公用語ないし国語として用いられ、教えられている言語である。日本人にとっての代表的な外国語である英語、フランス語、ドイツ語、中国語、ロシア語等は、それぞれの言語を第一言語とする者（いわゆるネイティブ・スピーカー）にとっては、もちろん母語に根ざした言語であるが、公用語としては、学校その他の場での教育を通じて意識的に学習した母国語である。

- ▶ そうだとすれば、外国語学習の対象となる外国語は、母語としての英語、フランス語等々ではなく、母国語（公用語）としてのそれらの言語である。母語としての外国語を生きなければならないのは、たとえば親の海外転勤にともなって現地の学校で学ぶ子ども、国際結婚をして外国で暮らし、子どもを現地の学校に通わせる親などの場合に限られる。仕事とりわけ交渉において用いられる外国語は、どんなにつたなくとも、読み書きを経由した公用語の段階にある言語である。
- 4) の媒介言語は、ある部分では国語（内から見れば母国語、外から見れば外国語）と重なる。現代世界において、英語は国語であると同時に国際語（媒介言語）であり、そのことが英語教育の目標をどこに置き、いかなる方法を採用するかを見定めることを著しく困難にしている。（この点については、後述する。）媒介言語も二つの類型に大別することができる。一つは、古代の標準ギリシア語（コイネー）、中世ヨーロッパのラテン語、近代以前の東アジアの古典中国語のように、書き言葉として整備され、国境を越えて知識階級のあいだに行き渡り、文化規範として機能する言語。もう一つは、リンガ・フランカ語、ピジン語、クレオール語のように交易等の必要性から生まれた国際混成語である。後者は、クレオール語のように、それが行われる土地の母語となり、公用語への道を歩み始めるものがあるが、たいていは母語にも公用語にもならず、制度的な教育の対象になることはないので、ここで問題にすることはない。前者は、国語が未発達であった前近代においては、言語教育の中心を占めていたが、国語の成立とともに古典語の位置に追いやられ、エリートの教養としてかろうじて存続することになった。〈古典〉の学習の意味と価値については、別に論じなければならないが、サンスクリット、ギリシア語、ラテン語、古典中国語等で書かれた古典の大半は、多くの近代国家（欧米諸国、日本）では、それぞれの国語に翻訳されており、古典の受容と学習は多くの場合、翻訳で行われていることに注意する必要がある。
- 現代世界における英語のステイタス——〈グローバル化〉と〈国際化〉：英語は、フランス語やドイツ語等と並んで、西洋近代語のひとつであり、イギリス、アメリカ合衆国、カナダ等の少なからぬ国と地域で国語ないし公用語として、豊かな言語文化を生み出してきた。他方、それは現在のアメリカ合衆国の政治力、経済力、軍事力の優位を背景にして、広い範囲と多くの場面で国際語（媒介言語）の地位を占めている。とくに経済（ビジネス）や情報のように、物事の構造よりは流通・交流が問題になる分野、自然科学のように、標準化された手法と道具——度量衡の標準化はその象徴であろう——に基づく研究活動を通じて世界規模の科学者の共同体が成立している分野では、その圧力がはなはだしい。このよ

うなグローバル化は、分野と局面によっては不可避な傾向であるが、それは国際化とは区別する必要がある。グローバル化が、文化的・制度的多様性を平準化して、単一の通貨や単一の言語、要するに単一の尺度で事を進めようとするのにたいして、国際化において問題になっているのは、制度・慣習・言語・文化等を異にする国（地域）同士あるいは人間同士のインターフェースだからである。いかなるインターフェースを創出するかは、場合に応じて^{まちまち}であるが、接触する複数の当事者の個性と独自性を可能なかぎり保持するのが前提である。経済活動や科学研究や情報技術がグローバル化に向かうにしても、その目標は人間の生きる環境とその生活をより良いものにするところにある。ところで人間の生活と基本的環境（衣食住と言語文化）は、無限の変容の可能性を秘めているとはいえ、地域と人間集団に応じて多様であり、その多様性を標準化・画一化しようとするのは、文化環境の破壊を目指すことに異ならないし、そもそも不可能である。このように考えると、グローバル化の局面で問題になる英語は、媒介言語（国際語）としての英語であり、国際化の局面で問題になるのは、国語——すなわち、それが通用する国・地域の文化を負荷された言語——としての英語である。

- 英語教育の目標——英語のいかなる局面を教えるのか：今日の日本において、英語のできる人材をこれまでよりもはるかに多く育成する必要があることは言うまでもない。しかし問題は、英語がいかなる状況、いかなる局面で必要とされるか、である。英語の必要性がこれほど高まった原因が、上述のグローバル化にあるとすれば、それに対応するために学ぶのは、媒介言語としての英語であり、外国語としての英語ではない。そこから次の三つの教育・学習の指針が導き出される。1) 言語に結びついている文化的負荷——この場合、アメリカやイギリスの文化——をなるべく軽くすること。2) 媒介言語は母語に根ざしているわけではないので、母語の習得過程を学習のモデルとして強調しないこと。とくに、いわゆるネイティブ・スピーカーを万能視しないこと。3) 研究の成果の公表はもとより、取引や交渉においては、情報通信技術の発展もあいまって、書き言葉が話し言葉と並んで、あるいはそれ以上に重要な役割を果たす。音声言語と並んで書記言語（読み書き）の学習を重視すること。もちろん英語は、外国語としても有力言語であるので、外国語教育の側面を無視することはできない。しかし外国語教育の大事な役割が、多様な他者・異文化を理解し許容するところにあるとすれば、グローバルな立場との癒着を避けられない英語は、外国語教育の対象としては困難な問題を抱えている。共通教育の枠での外国語教育から英語を除外することも一つの考え方であろう。
- 国語教育：母国語としての日本語の教育は、初頭・中等教育においては中核に位置すべきものであり、高等教育においても、現在の状況からすれば、もっと重視されなければならない。それは、それは、言語の公共的使用の能力が、あらゆる領域のリテラシー（科学的リテラシー／社会科学的リテラシー／人文学的リテラシー等々）の根底にあつて、それらを可能にする基本的なリテラシーであり、人間を自律した市民に作り上げるための必要条件だからである。リテラシーは元来、文字を読み書きする能力、要するに書かれた文章あるいはテキストを理解し、また文章を綴る能力である。ここで注意しなければならないのは、テキストと情報の相違である。情報は、知識の要素としてデジタル化され、ある目

標の実現に寄与する断片的な材料・手段であるが、それに対してテキストは、それを綴る主体の意思表示・態度表明であり、読む側にもそれを丸ごと受けとめ、理解することが必要でありまた期待される。仕事の必要に限定されない人と人との交わりにおいては、相手を手段ではなく目的として遇することが求められるが、文章は、会話と並んで、主体の表現にとって本質的な場であり、したがって書き手と読み手の主体同士が交流する特権的な場なのである。(会話には直接の対面が必要であるが、文章においては、時間的にも空間的にも離れた主体の交流が可能になる。)それぞれのテキストは、特定の事柄に関わりながら、それを綴る主体のあり方を全体として表現する。それが可能なのは、テキストが離散的な要素(文字、単語)の寄せ集めではなく、要素同士が相互に浸透するアナログ的な全体だからである。リテラシーは、文字の読み書きの水準を超えて、アナログ的なテキストとその背後にある主体を表現し理解する能力と考えなければならない。国語教育において、伝統的に文学あるいは古典と呼ばれるテキスト群が教材として重要な位置を占めてきたのは、それらが、言語の能力を最大限に発揮した主体の表現であり、リテラシーの開発にもっとも有効な手立てだからである。

- 外国語教育：グローバル化と並んで国際化が急速に進展している今日、外国語の教育の重要性はいくら強調しても強調しすぎることはない。外国語の学習は、世界の多様性の認識、異文化の理解と尊重への扉を開くばかりでなく、自国の文化と言語(母国語)を反省することを通じて、その特質を自覚し、それをより豊かで洗練されたものに養い育てる役割を果たす。国語の形成においては、それに先立つ古典語あるいは有力な外国語との接触、すなわち他の優れた言語文化の所産(古典)を自分の言語に翻訳や翻案を通じて取り込む作業が不可欠である。近代西洋語の形成の背景には、ルネサンスが再発見したギリシア・ローマの古典の研究と翻訳、あるいは宗教改革が重視した聖書の翻訳がある。近代日本語の形成に決定的な役割を果たした文学者——森鷗外、夏目漱石、二葉亭四迷、永井荷風——の活動が、それぞれドイツ語、英語、ロシア語、フランス語との緊密な接触に支えられていたことは言うまでもない。日本語のよりよい将来を築くためにも外国語教育は不可欠である。

以上